

諸藩考

下

5  
695  
2



剝  
門  
號 695  
卷 2

東京生田區大久保  
藤下町百拾貳番地  
坪内雄藏藏



一番

左

落葉の地は、いづろ、赤い

風水

右

たのむ身帯を末 微細なり、心を解き

松濤

右又ありとある富士の後め、白のむけ

いさくに開え、ゆるさく、いさくも白才園

いさく切草、五ふあ、そ云、舞、い、い

切草、いさく、いさく、いさく、いさく、いさく

いさく、いさく、いさく、いさく、いさく、いさく

持

明治二十八年十一月五日  
坪内雄藏氏寄贈



二番 賭

左 霜

親と子供家おをいかに馬ふ

漢石

右

霜より扇御をいかに舟

勇拓

このいかに舟のいかに舟のいかに舟  
あつた舟のいかに舟のいかに舟  
ひかに舟のいかに舟のいかに舟  
せかに舟のいかに舟のいかに舟  
さかに舟のいかに舟のいかに舟

三番 持

左 夜典

家と月夜典をいかに舟

右

いはれ程得矢をいかに舟

たの白志けい原をいかに舟

いかに舟

たの白志けい原をいかに舟

付れと母をいかに舟

いかに舟

四番 膳

左 枯燈

松苗も枯燈の月より 燈系 枳風

右

大橋の枯燈より入り哉 全峰

ひらりの白木枯の吹風にて 苗松の燈よ

くさくさたる風のやまを同くしり

あつたのこす松紅梁のすきか合て

一むたけきくたもくさかおゆく風系

又移るくはれも苗松のくさか同のま

竹の舞

五番 持

左 網代

るゆつりして水のぼり 後、兼様 心水

右

網代木乃ゆきさやもめる水 不角

網代の床よりまきほくもる他意めつ

らゆきしてやま 右もる何 後乃

杭のぬきもるやま 右もる何 後乃

たも感何とさく

六番 勝

右 石菜

破き菜乃ほろよ顔くは 麴くを 調都

右

石菜喫や指の引控し雪車乃依 立坐

左の自麴とよりつものく我方取はれと  
と申す取とよらんを取す 蔭も 蔭もいふを  
く取くわしを付くよ 引控し雪車乃  
自まきとよりつもの蔭は仍以左取す

七番 勝

左 鴨

鈴鴨乃春つるま 蔭る月さし 嵐雪

右

鴨くつし 菜あをけり 蔭る月さし 魚兒

蔭かものあつるをちる 蔭る月さし  
一白やまらるるもして 蔭る月さし  
妹、りるるをちる、六月、蔭る月さし  
云ん、りるるにや右の白も 蔭る月さし  
まぬをちる、あられ、蔭る月さし  
鈴のあつる、調都、蔭る月さし

八番

左 氷柱

氷柱のまじりたる極まじりたる 柳の糸 一桃

右 勝

門つりて 閑居をく ゆる氷柱哉 琴風

氷柱とさうろ 柳の糸のけしき 細く

かゝひく 糸ふるよ 右の糸を 煙をく

くくくくく 糸ふるよ 糸ふるよ 門を

閉より 糸ふるよ 糸ふるよ 糸ふるよ

糸ふる

九番 持

左 霰

あつらふに 霰をまき 氷柱の糸 李一

右

氷柱の糸の 霰をまき 氷柱の糸 什風

烈風寒威 噴る 氷柱の糸 冬のはらけ

かくては 糸ふるよ 糸ふるよ 糸ふるよ

右の糸ふるよ 糸ふるよ 糸ふるよ 糸ふるよ

糸ふるよ 糸ふるよ 糸ふるよ 糸ふるよ

糸ふるよ 糸ふるよ 糸ふるよ 糸ふるよ

糸ふるよ 糸ふるよ 糸ふるよ 糸ふるよ

十番

侍

左

神樂

法神亦少火を護衛する所なり

去来

右

神和す一よりねふ 神楽より

孤屋

右より神楽の舞より一考へて取ら

つゝ

右より神楽の舞より一考へて取ら

いゝ右より神楽の舞より一考へて取ら

より魚——

十一番

侍

左

願巾

山甲平 願巾 一人も外

京

観水

右

法三人の舞 出方か入るる中

麻言

目より舞を山甲の舞に於て後より取ら

舞もはるる右の舞より取ら

中野の法師人といふ舞より取ら

より舞より一考へて取ら

十一番

十二番

左 蝶抄

右 稿

何よりよきとて遊ん 蝶はよみ 挙白

蝶よりよき寺は老く 蝶は休哉 不ト

蝶よりよき寺は老く 蝶は休哉 不ト

先珍き也 面白 蝶は休哉 不ト

なほに感心 蝶は休哉 不ト

にほけふ 蝶は休哉 不ト

蝶は休哉 不ト

一柳軒石下乃如 之 貞を 蝶は休哉 不ト

蝶は休哉 不ト

あはれき 蝶は休哉 不ト

月と蝶は休哉 不ト

事 蝶は休哉 不ト

月と蝶は休哉 不ト

牡丹と花 蝶は休哉 不ト

折と蝶は休哉 不ト

一 蝶は休哉 不ト

一 蝶は休哉 不ト

一 蝶は休哉 不ト



はふ名に流るの紫をいほのそまふにま  
積て四節のふれ末まをまよえあて我も  
其一りしとてふまをわいあまをうまの  
笛とてまをいほまをいほまをいほま  
目まをいほまをいほまをいほまをいほ  
真まをいほまをいほまをいほまをいほ  
ほのまをいほまをいほまをいほまをいほ

桃書書

初懐紙

日れ表をさすかて鶴の歩まの乳 其魚

元朝の日れをさすかて鶴の歩まの乳

鶴乃歩まの乳をさすかて鶴の歩まの乳

まをいほまをいほまをいほまをいほ

ありまをいほまをいほまをいほまをいほ

貞徳老人の云詔辨世道ありとまをいほまをいほ

まをいほまをいほまをいほまをいほ

きこころがりのちりりて枯るる木の梢に降りてきこるるを  
けりてやうく相のそとより相の本といふ人も何事なく  
元祖小本集はをめぐりて本結のそとよりおれどもはのうらな  
ちたひおくるうらうくしてはけりけりて一但相のそと見  
たて新集後集乃おとがらるるにふけり

雪村の柳見より梅さして 松風

春三の祥長さく風流くををけりけりて春白の葉とす  
ちりりけりて柳見より梅と河邊へ来集不對之雪村の雪の白

春の柳をさしてはけりてその柳をさしてと自舟小梅さしてはけり

相表の祥長さく相の本を誦す事特二けりけりて大切

酒の幌入り入達の月 二時

酒の月なれは柳さして道の傍に酒をさると一の旅の傍に酒を幌ハ

暖屋をさしてと云ん事さしてはけりて

秋乃山ふ来れりけりて 芳里

秋のそとをけりて市小梅さして事特二けりけりて酒をさしてはけり

秋のそとをけりて市小梅さして事特二けりけりて酒をさしてはけり


ふとふと秋の山と大抵も玉なる大切に思ふ着人のを敬味は

山吹電  ちりちりちり 杉風

あると小山家の体に見あつて付ゆる楓師の心を将山様を

炭氣を捲てみそを妙体別業たるいととよも炭電の白信

終よ人のよねにを足付くる新益とん

里  け妻かこのふれむとちり 仙休


付中 別業れー 炭電の白を細みこの妻を月以採の採スノ

法  冬楓のふり能能  法  冬楓のふり能能 

赤系る 駒り 一雨おちれせよ 幸下

是も青系之何を付くるともふく何を極めたるかた

里くの妻ととより様神を去出ーむく縁をさし係りて

而を得ー信り系る毎口筆以ふ様 

朝あつた之を山を物むさばれハ 奉白

是より信りて信者の心は深く思ふとあは成一を

機体之勢根たふとせよとく而を信するん深切な信

念佛り 信し信し信し信し 朱結

は白儘の具をあらけしはれそん神社の佛者を忘るる  
と多分の儀も神前より祀傍之三つの中より社よりへと導  
の儀もあつてさう

勝よりく連歌の具をほつとらん 故二

連歌の具をほつとらん 故二

一入はまよりゆれ

歌書かきまらぬ けく 松の表う 千り

けくはまよりゆれ

有明の梨打鳥帽子 子あつり 色甚

付振別あし 藤の車の鳴りて又 一白文と云ふ

あつり けくはまよりゆれ

具眼をけくはまよりゆれ

く身云の毛儀らとあ乃見 松さぬ 筆

あつり けくはまよりゆれ

あつり けくはまよりゆれ

勝りあつり 一白の本様 けくはまよりゆれ 文終

寧唯酒盛と云ふは此のあらはるるよりの白を

思ひ儲くもの種のものれくもほろりゆく前身の思ひをぬらと云

よりふるりといふ文やなほちり無の白池を感懐あり

後 位 女 子 ぬら くら くら

具角

後位女は後位の妻といふんよとて指すなりと云くは後位の

思ひにぬらぬらと云ふはくらと云ふはくらと云ふはくらと云ふは

万の物思ひはらやう小笠原の思思なりと云ふはと云ふはと云ふは

はらやう

山 女 の こ 乳 を 吞 籠 乃 夢 乃 加 れ 一 二 存

石の里水田漢浦お小多く候侍るを候檢更級より學ませ

山頂より候侍る石を山女とて河らけり方思乳を吞籠といふを

女らつちまよとあらひらひらとて思ふるは思ふるは思ふるは思ふるは

新 衣 甲 斐 友 の 花 也 也 見 ん 一 相 風

續の衣も思ふよより山川の思ふよより左邊神歌(古)

きる付やうを山類をあらひらひらとて

法 の 土 家 刺 敷 を 埋 と 並 せ 一 杉 風

花の如くく地冷きを月そゆの無常を観しつゝ

甲斐とつゝ古人仙者古徳をまじりて無常も世に

あつきの之刺髪を怪しむ他とて新髪を衣をこの侍る

たゞの記をよみかきその戸 芳里

新とてなしそを庵隠者の旅をりしものあまふ風家きき

さく日しつり車 かしゆかきもの伝 杉元

前白隠者の辨を對するを官禄を辞りて隱居位人のつゝ

後へては足車をりしつゝとある辨之書もよみし他のつゝ

小龍しつゝと目と人

はしる小角をもつゝかたつゝの仙化

妻の弟を母と事よのけりしつゝかたつゝつゝとつゝ

かたつゝつゝのつゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝ

残る雲山子の残る雲山子の残る 朱結

是又春のきつゝは付振るをるつゝとつゝとつゝとつゝ

破る雲山子のきつゝるあまをりきつゝとつゝとつゝとつゝ

喜をそ残るつゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝ

三つの子 酔て 膝をさるる 舞 翠白

白世の工をなすを無して 物をもるん 襟をさるる 子あり

膝てと 舞し する 膝 膝く 舞白し

及ちう 膝ゆり 子あり 膝をさるる 舞 子り

世白付に 少し 骨を折るる 白く 膝を 膝を 現在に 子あり 子あり

下官れ ぬん 膝をさるる 子あり 子あり 膝をさるる 子あり 子あり

膝をさるる 膝ゆり 子あり 子あり 膝をさるる 子あり 子あり

膝をさるる 膝ゆり 子あり 子あり 膝をさるる 子あり 子あり

とけし 膝を 膝をさるる 芭蕉

膝をさるる 膝ゆり 子あり 子あり 膝をさるる 子あり 子あり

膝をさるる 膝ゆり 子あり 子あり 膝をさるる 子あり 子あり

膝をさるる 膝ゆり 子あり 子あり 膝をさるる 子あり 子あり

膝子 膝ゆり 膝をさるる 芭蕉

膝をさるる 膝ゆり 子あり 子あり 膝をさるる 子あり 子あり

膝をさるる 膝ゆり 子あり 子あり 膝をさるる 子あり 子あり

膝をさるる 膝ゆり 子あり 子あり 膝をさるる 子あり 子あり

あらし雨ふふ別あそび

紫分の風を矢落切り入 工本

矢落切と云行先あそび

者ともんぬれしと物陰をこん付きと物陰をこ

の神と云りしと中將をこ人の意と云りしと物陰をこ

毎とん付するたこのあそびと云りしと物陰をこ

何とん付するたこのあそびと云りしと物陰をこ

かたしとて下との思ふ物陰をこ 其角

獲法の真珠ありしと云りしと物陰をこ

首のちふ云控ふる物陰をこ

あらし月夜乃思ふ物陰をこ 文鱗

冬ノ秋のを深と物陰をこ

志と月と云りしと物陰をこ

竹竹のりし物陰をこ

石の戸ノ榎鞍ふる物陰をこ 琴白

あらしのあそびと云りしと物陰をこ



鞍馬より下野に上りて高野の山中に破く漢子の備十

市此里を管り里を川をくけて徒亦小侍して付り居る

頃の奥平守正二月の文級と付侍るを南條ハ白紙取寄に

よりて名不具あるをいふありし

家之代此乃川源治 李下

此白紙中の表所持之鞍馬をくくを侍りて侍正と谷とておも

ふはくしゆ之石の戸権をくくしゆく源治を代をくくしゆくあり

此書之表白紙清く水とくくくくくくくくくくくくくくくくく

一日感懐不夕三代といふ程か骨かた名人とはいへんといふ

永禄ハ重之 一 松ののり力 仙代

永禄ハその代を云人爲之源治の名人多くありて其代に仍て

金之と云ふ是れ白紙のり力と云ふは侍りて侍りて侍りて侍りて

味中一

永禄此回極之美濃小狐らと云母 朱後

只上代の孫之金之といふありむりて在云白之昔を扱毎の間暇

して重之と云ふ事くくく侍人侍り美濃を以のちこくくく

田舎の風俗もさふやうなまじり

とく起てつ 務めよん ぼくは 芳里

晴をよき合をよき之長徳近江と一郡をよきを都云を

よら持てて支拂ふせんとか起てるといひきり

船より 茶の湯の浦表なり 其角

ほろき次水田津浦ありつらむ勿論之船中も茶の湯なり

さる風俗奇特と思ひけぬ所を茶の湯を出る茶意の好まなり

これと思ひよむぬを茶の湯と云ふは又俗語の通と

はくしてて人の娘をめつて 李下

此の趣向は他と異なる具足なり船中も風俗人の娘を盗

る茶の湯をよきと云ふは又俗語の通と

所見をよきと云ふは又俗語の通と

此のつらむ茶の湯の人の娘をよきと云ふは又俗語の通と

強靱の堂より おもひ打ちし 相風

此のつらむ茶の湯の人の娘をよきと云ふは又俗語の通と

を強靱よりつらむ茶の湯の人の娘をよきと云ふは又俗語の通と

待りしの鐘を撞くその中 芭蕉

待りしの鐘を撞くその中 芭蕉の堂とつと時ハ鐘古堂新迹也堂をく云振ふ系法也

カモツは地味と云鐘をくをて鐘の地と云て鐘の中

証は鐘の地と云て鐘の中

を待りしは叙し及ぶ能く味多也

友より鐘は地味との 芭蕉 仙化

友より鐘を以て地味と云待りしは鐘の地味と云て鐘の中

〜〜〜〜〜

雨より中

雨より中 かつらに敵はし 一斉

敵はしと云つたり雨雲の味を云のたりと云つたり不記と

いふも鄙曇也一云も秋ふまはつたあつた古さふまはつた

〜〜〜〜〜

白ふまはつた〜〜〜不記

門ハ魚はし 磯子 乃ノ寺 奉白

門の森ありては寺ありの門ありて寺あり

佛より一そりまよはりにけりける節に、佛者の慈悲を思ひおこし

理ふそり一抽くよ民者おしひ七法一 其里

は白き途の海辺の車軌まぐる節に、民屋寺中、小押入て、松橋

したる松花玉のさる節に、かき青一、その市松よ、安樂のこゝん

青くくたれひ、念を白をくく一

何く、ゆるく、牧花、清る、揺るよ、其角

前白、花さく、整り、きり、野馬、さき、く、出さる、法士の、節を、お

白一、三白、れ、ま、ま、ま、白、れ、整、り、ま、ま、白、の、新、し、ま、ま、く、く、服

を、更、一

聴の、一、そり、一、夕、り、と、月、よ、改、め、き、り、一、文、難

修く、竹、く、文、白、さ、り、一、く、漢、さ、き、る、波、ま、よ、く、云、流、一、空、の、如、松

れ、は、切、老、の、を、使、ま、ま、ま、之、夕、日、漸、く、一、と、聴、の、一、と、長、爾、の、ま、ま、ま、ま

西、行、の、雲、の、戸、小、入、り、の、彩、を、あ、く、た、ま、そ、と、後、白、月、を、ま、ま、ま、ま

一、白、ま、ま、ま、ま、一、長、味、を、本、音、小、用、お、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま

ま、ま、ま、ま、ま、の、流、を、ま、ま、ま、ま、一、に、佛、刹、ひ、は、れ、は、れ、ま、ま、ま、ま、ま、ま

ふ、白、は、余、清、よ、利、お、ら、の、幸、先、証、を、り

乳乃鈴屋梅さむき たりき 李下

法下の景気の在り白く月夕のまじりては

稲妻乃本れ回をふの心 たる勢 舉白

佛よを法小のころし 乳ありのの及まら 春の本れ回勿

端之本のり小稲妻面白く 疎上秋の秋の夜も

法をれさひり 空を小及を解く 根風

は白の付中 白く秀遠之相も 雲の夜の稲妻むく

雲の聖聖より佛をを 疎上秋の秋の夜も

人あまの年とり 物をりき 楊水

は白秀遠たり 聖の白のり 雲も 秋を大晦日の秋り

秋のい付之先 疎を聖ハ 雲も 佛をり 小す あり人ハ 年とり

物をかりて 疎をり 佛をり 雲も 秋の夜も

味さ

酒ゆりいけむを山 洞 朱注

金山ハ 秋の 大盛人 あり あり あり あり あり あり あり

ゆり あり

高河の能ささ味心ほりて一瓢ふ白解一  
はらりんやとほりたれは良きり加筆一好  
後りの序をせぬ翁の持病快うて五十能  
あつたやあつたをたらしけり

貞亨三丙寅年正月

吾五十能ハさしよ撰書る花の政事小出と  
いと書多ゆほりかかぬハささささ  
手むらふと小書林俊乃後て一河書と撰也

中ホあつて一をささしけり

松のあつてうけて新よ入る本権汁 希丙

松のうらなひささしけり

松風も多きけりささしけり 全

松風吹さし松風の音もささしけり

帆乃腹や花のうら風吾そり

作者  
不知

世傳うらなひささしけり

又あつたのうらなひ

而乃隆日とらるる堂のまはれしと

其のしに濃るる髪をかきしと  
化名

尻小籠履もはきしと

去書

五吟

餅つきれと一煮くさくさ床のなま  
佳峯

雪より別るる雪は乃 石助 乙孝

餅つきの靴は海ゆりをして世はのゆるとるる一雇人の

座敷は直下うら才まもまのなま一 暇は雪は乃

あまふ人ふまのれゆふ尻かかれ男はれハ雪ふたれとらと風

流つけとらとら

二階うらと伝呼る船はとら  
鹿羊

鳥の飛を 遊と 遊つけ 涼菟

ふりの百物なれは二階の云傳よりむきにそ安御り

私人くくよ才三の一書なる一そふハ才三の格よりけり

く一巻のやういまぬるよりかたけななりけり物あじ

次ハ江辺のそをよして別の子細あけり

冬果のつうたふ小はるけり 晝乃月 信晶

柿ふふくく かのあけり 峯

酔う鳥よと見あけきこふ山崎と鳥月を足つけたるゆい

もけそと云はるるそそ中のそふふりてふちり

と見て柿喰ひ客れ木のゆりといふ白ハくそそりま

かたり

と台れふくと乃秋ハ一系ふ奇 孝

おのく 鼻の高ふそもこうく 羊

柿の場そそる客の新取之山里とそりけり人なりハ奇を

きうとそそ 遊ひをそそ人次ハ天台といふあそそり天狗

と思ひよそそハは林鹿の信師をそそ自傍のゆきといふそ



ねめく〜とめ子小公事を肩てるるゆ 菟

あき秋の〜り 仲をさ〜 日相

此節能治の命之天台小天狗と仰しま〜く母の人い〜ん

ね〜つ〜子神ト云く〜女子小公事ハまけ〜とバ

鼻のさよほり〜何の〜義もな〜と前白と

自在小〜り〜あり次ハ口流の公事と〜り里心のさ〜

く〜〜り〜〜〜ぬも色海〜ゆり〜

ね〜地な〜

ふんまひを去ひ 袴あるさ〜か〜 奉

神の葵のき〜あ〜ら〜ゆり 孝

一白の奥之地のす〜〜〜ら〜り〜る〜の仲と〜

たりと〜を〜けは〜結き〜あ〜り〜あ〜ひの〜

あ〜ら〜一次の白むら〜〜〜袴ふおとのとら〜〜ひ〜

さぬ〜

青や〜にか〜る〜ぬ杉の立たひ〜 羊

さ〜も〜ま〜ふ〜ゆ〜 月 新 菘

此所記附のり多り神家の所りまらぬえさうふしを次ハ  
菖菔の納涼之移のらういと涼また新は師ふらういさ  
ハやくと静かきさゆと

ひらき戸り勝手の砧ひき  
品

ハ幡の午房今戸引らじ  
峯

比白吾所まらちめさ静ふ長楳ふなとわらうあ

ゆらもさねののゆり人なり次ハ時をわらひとせな

すや引らん望月の物と一白のひきひとわりとら

室かーと敷族多き  
花 十巻 草

とまのち柄  
千石

一家のなまら人あふ竹の子時小差我をばひ午草の

秋はハ幡へと花の白ふれハまらハハ付より長履此

人まらんまらひさ中ねお新も又とら

嚏のおうねる顔り  
喜れ 丸 菟

由新をすれハさ  
飯を 盛 晶

注所付るし子石のさうら男をさハ座上ふりて新と

横柄よりと見てくさめ小あめさたりといひけり及くまゝ  
傳とさうん決りてむらうーお白れはさほをんまうてくろ  
くあゆみさるほを三枚をり登るさたるもりて供はあ  
これがえー

孫六の吹草さうり雪丸降 米

古き若物れ尻ー級所 孝

はる別義なり一振舞小祭とて志津孫六の吹草ならん  
と食とち果をり次々客人の一舞之か程の白さへま露

かきーと揚

久ーく逢く何うらや 羊

夜船小ちのよ 葉 柴 乃 折 蕉

はるまのまにふれはむ事けー打越はあめとのもさ  
て若ーうまをー白おうーこれの附取のま化うてゆーと

まつぬーはあむらうーこれの伏見あまをてけりおま

こゝろのあーむ

居眠のす小茶をさむ物なり 品

絆の次子——読義子身こぼく 峯

は白附取とくは上門の自性の教ふ故——在賦リハ榮を身也

とみ柳のれと春花坊う白ははくく多末を飲よそ過——

淡きよ色新并却くお坊と一白を居ていとこれハ付取まされ

やせー口よありて抱けお序てなるん——

言者とといくを横睡も こととまきりり 孝

松小志られのさくね 絆 かなあ子 羊

ちくこれ種族を救ふぬまきんハ又まきんは尚書の内まきん

編初と見え——次の曲之尚書の内うね孫とまきり付まきりつ

まきり松いとねまきりよまきりあ——うらねまきり

月の影くらりーふり乃青花箱 菟

る花顔の 翠く言の 好 口鼎

白書の白い余師の内うさなれハ了くハ自白と見え——かむの

な——いありて青の間のこけいーありといつ——うまきりこくうね

絆まきり何ふとまきりかまきりかまきり——次のたまきりうら

ぬ女子の顔容之野々言とを黒木の秋なり

後の取付と妻よの単衣 峯

一きーワ身へ温鈍くらうー 孝

はるお幾定て日候ー 整くまるとりやうまよりまほひ

ワそれひきりは次付かくー 腹ふくらうひたせぬ温鈍も替ふ

この道あり二きーと片一白れ風流之較多なるの姿むさー

呼み来る使りー 星をくらう日廿一 羊

森間ふたりむむ例ー の長刀 菟

此白えうー 温鈍ありしと星をわひくらうたうー 菟

赤白うらや何と温鈍のむふありそなる星の空よと

れりーがむぬありと初人ー 次のもたうらうー 汝

ちりてあをたくとまきとまかまなさんとー 山たきうと

つふ例のむのなり

よふぬう降りて今ふとよの 咲 晶

よふぬう降りて今ふとよの 咲 晶

長刀のけりあふのふとて整うー ぬうー 花の咲たうとけり

よふぬうー 執筆の白列義なりー おまなつとをあらわるとら

如鏡つぎれ一巻の曲からうして花やう  
 かりいれをうかがうたうれくるくは  
 委ふおのり一巻の夏化のゆゑ  
 くるくは

東の心切解

えん禄辛の六月十日

鳥水文

大坂書林鹿島献可堂藏版目録

諸君忠告

七才子詩集 小本 一冊	發蒙書東式 三冊	伊勢赤倉志 六冊
同 掌故 三冊	傷寒五法 五冊	愚問賢注 一冊
同 註解 二冊	茶道七事式 二冊	同六窓抄 三冊
同 國字解 二冊	町見辨疑 西川氏著 五冊	盆石圖式 二冊
詩法授幼抄 小本 一冊	三界一心記 一冊	茶室の
總句律平仄位置ノ圖ナラニ詩作ノ只 ニナルキヲカシルニ熟語ヲカケル	將基指覽抄 小本 二冊	農家心得草 一冊
芥介集 詩歌ノ書 全 一冊	勝地百益 二冊	狂歌古今船 一冊
詩對類語 全 一冊		
詩家法語 熟字 全 一冊		

大坂書林

和歌桐火桶 二冊

新元注 一冊

大毛紙綴り 二冊

同拾遺 二冊

其角 二冊

同八元 四冊

貞徳 二冊

日 五冊

傾門 一冊

芭蕉 二冊

雅文 一冊

半化 二冊

撰良七 一冊

月 一冊

文 一冊

俳諧小づち 一冊

同来 一冊

同四季 一冊

芭蕉袖 一冊

同小舟 一冊

同松竹 一冊

沈潜 一冊

沈潜 一冊

同流 一冊

同流 一冊

同流 一冊

同流 一冊

歌水 二冊

柳香 二冊

西宮 二冊

俳諧 六冊

同 一冊

同 一冊

同 一冊

同 一冊

同 一冊

同 一冊

同 一冊

同 一冊





